小田原史談

第23号
発行所　小田原史談会
小田原市幸一丁目
郷土文化館内

印刷の御用は
清水印刷
小田原市幸一ノ一七
電話小田原三四七七番

新秋の天守閣（幸一丁目より望む）

古きものと新らしきもの

C・M生

とかく古蹟保存と文化施設とは両立しないというのが現代の通念で、往々にして双方の間に論議が起り、賛否両論にわかれて相争う事実が各地に亘って見られる。双方ともそれぞれの事由があり、どちらに軍配をあげるか、判断し難いのが現状である。懐古調に浸って古きを偲ぶ人と、新らしきを貴ぶ文化人との差である。われわれ史談会員より見れば、なるべく古いものは保存しておきたい。それは単に郷愁という感情からではなく、これらが総べて生きた歴史であり、貴重な存在であるからである。

今日、多く問題になるのは、観光施設である。数百年も経た由緒ある樹木を惜しげもなく伐採し、或は土地・建物の変形や取毀し等非難の的となっているようである。観光ブームで各地競って観光客の吸収に熱中せる現代において、旧態依然ではもはや客の足を駐むることはできない。勢い問題を引起こすようなことになる。それで或人が言ったことに「観光資産には自然財と文化財とがある。文化財というのは祖先がつくって来た生活の歩みであって現在の人類がつくれないものであるから、それを踏襲することによって、新らしい文化ができるのであり、この文化財があってはじめて観光の特徴が活かされるのである」といっているが私も同感である。わが小田原城趾に天守閣を再現したところに特色があって観光に一役を買った。観光には自然と文化財とをどちらも活かすことであって、どちらか犠牲になるという考えは、余りに性急に物を判断するからではないだろうか。現在あるものはなるべく活かして、それに新らしい建設を加うることが文化人としての知識であって、古い物を毀さなければ文化的施設はできないと考えるのは智慧がなさすぎると思う。このことはひとり観光施設のみでなく道路改修やその他すべての文化的施設に考えさせられる問題ではなかろうか。

古人の詠んだ秋風（一）

大伴家持（万葉集）
今よりは秋風寒く吹きなむ
をいかでかひとり長き夜を
寝む

読人不知（古今集）
昨日ことさ苗とりしがいつ
のまに稲葉そよぎて秋風の
吹く

同（後撰集）
秋風に草葉そよぎて吹くな
べにほのかにしつる蜩の声

躬恒（拾遺集）
彦星の妻待つ宵の秋風にわ
れさへあやな人ぞ恋しき

能因法師（後拾遺集）
都をば霞とともに出しかど
秋風ぞ吹く白河の関

春宮大夫公実（金葉集）
あだし野の露吹きみだる秋
風になびきもあへぬ女郎花
かな

源道済（詞花集）
思ひかね別れし野べを来て
見れば浅ぢがはらに秋風ぞ
吹く

前中納言雅兼（千載集）
女郎花なびくを見れば秋風
の吹きくる末もなつかしき
かな

藤原基俊（新古今集）
秋風のやや肌寒くなるなべ
に萩の上葉の音ぞかなしき

僧正行意（続後撰集）
帰り来む程をばいつと白露
のすがるなく野に秋風ぞ吹
く

前左大臣（続古今集）
ひとりぬる床は夜寒の秋風
に下葉色つく庭の萩草

直情直言

蓑田長平

故吉川英治氏は小田原の出身であり、先祖の墓が幸三丁目正恩寺にあり、祖先が藩の輕輩であったことは人の知るところであるが、もと祖先は戦国時代勇名を馳せた吉川元春のわかれで、関ケ原戦後敵方から大久保藩を頼って身を寄せた浪人の一人である。これら浪人は外者（よそもの）と云われて輕輩以上の士分には取立てられなかった。吉川一家も代々それに甘んじていたのであろう。要するに当時は小田原藩に限らず、各藩ともに政策上の必要より同様の扱いをなしていたものではあるまいか。今日とかく他よりの移住者を外者扱いをなし、甚しきは渡り者と称して輕侮せる封建的風潮がときによって見られるのは、この遺風がいまなお残存しているのかも知れない。

古代のわが郷土

内田武雄

「万葉集巻十四」「東路のてこのよび坂越えかねて山にか寝むも、やどりはなしに」と言う歌もある。国学者によると「てこのよび坂」は、静岡県の蒲原附近にあるらしい。又地名辞書では、蒲原から岩淵方面に越える新坂（七難坂とも）に擬している程度で、現在のところ未解国歌の一つに属している。

安田徳太郎氏著、万葉集の謎の文中で、これもウソである。レプチャ語で、テコは「ひじょうに険しい」となっている。だから、テコ（険しい）（の）ヨビ（坂）は、地名でなくて「ひじょうに険しい坂」坂になってしまう。ヤドは「休む」「泊まる」で、リは家であるから、ヤド（泊まる）リ（家）は「泊めてもらう家」である。そこで、この歌は「東路にあるひじょうに険しい坂が一日で越えられなかったので、山の中で休もうとしても、泊めてもらう家などはなかった」となってしまうと書いていられる。

私の考えでは「東路にある非常に険しい坂といえば箱根山に登る坂であろう。この坂はおそらく、久野の坂下から登って舟原、明神嶽、宮城野の碓氷峠、仙石から乙女峠を越えて御殿場附近の横走駅に通ずる道ではなかったろうかと私は思う。なぜならば防人の歌のなかにも、上野国から出発した青年たちは、碓氷峠を越えたときは、もうこれで故郷は見おさめだとばかり涙でくもった目で、じっと関東平野を見おろした。というが、これが箱根の碓氷峠だと私は信じている。

「ひなくもり、碓氷の坂を越えしだに、妹が恋しく忘らえぬかも」（巻二十）これと同じ先に述べた、「東路の、てこのよび坂、越えかねて、山にか寝むも、やどりはなしに」と考え合せても、当時の主要道でなくてはならぬ、多古には坂下の地名もあることもこの道の栄えた時代のある事を示しているし、道に沿う久野地区からは縄文時代の遺物を始め弥生時代の遺物も発見されているのであるがその弥生式遺物の中には先に言った仙石原遺跡のものと同じ形式のものが出ると言うことは、この両地区間にこの道を通じて何か交渉があったことを語っているようでもある。

（久野公民館発行の「久野歴史」による。

又この地区が県下でも有数の後期古墳地帯に属することも当時にあっては現在のような袋小路的地でなかったことを意味していいよう従ってこの道は恐らく縄文時代頃からの古道ではあったろうが、国府の設置と共に一時栄国府の移転と共にその繁栄を足柄峠に譲ったもののようにも考えられる尚、この道の盛衰と共に駅路の上に於ても変遷があったのではなかろうか。国府推定地は先に述べた、和名抄に言う当時の高田郷の酒匂の地に第一次国府があったものと私は思っているが其後酒匂川の出水により、高田本郷に移されたのではなかろうか、今の小田原市高田に宮町と言う地名が残っていて、宮町を取り巻く外廻に現在でも三メートルぐらいの高さの土塁が残っているし、又、大正初期までは深さ一丈ぐらいの外濠も残っていたが、今ではその濠もうめられて、一部では、自然のままにのこっている所もある。宮町の外廻りは最近まで竹やぶにおおわれていた。なお宮町入口は南にあり北の出口を今でも瀬戸と呼んでいるから、あるいはこの地に役所があったのではなかろうかとも思われる。関東のあちらこちらには、古代から土着の豪族が住んでいて、大きな勢力を持っていた。それは各地に残っている大きな古墳からも想像できる。その後大和の政府はこういう豪族を征服して、奈良時代には、すでに東北地方もその勢力圏にはいっていた。土着の豪族は反抗した者もあろうが、たいていのものは帰順して、その引換えに、祖先代々の所有地の没収をまぬかれた。一方討伐軍たちは軍功によって、それぞれ領地をいただいて、その地方の領主におさまった。

これが荘園の始まりである

又酒匂氏（酒波氏）もこのような土地の豪族の一人ではなかろうか、今小田原に小八幡と言う部落名がある、古事記では天孫族が熊野に上陸して敗北した時に天からヤタガラスが助けに来て、その道さき案内でぶじ吉野にはいったとある。これはカラスではない。チベット語で、ヤタ（征服）ガラ（征服）、ス（軍）、はっきり征服軍のことである。

ところが、征服はまたヤ・ハタは征服者になった、これが八幡である、「万葉集の謎」（安田徳太郎著より）関東には八幡社が多いがこのひろがりをたどれば天孫族の関東征服の足あともはっきりすると思う。「榊葉集にみえる文永元年十一月廿二日付の幕府の下文に、「神領相模国古国府領所」と出てくる神領は余綾の国府に対する国府を意味しているにもかかわらず、地名辞書では相模の国府の地は移動がなく、最初から余綾の二宮の地に置かれたとしているのでその地名辞書の説を駁するために平塚八幡説に立つ沼田頼輔氏が引用された、石清水八幡宮文書の保元三年十二月三日付の同社目録に「相模国旧国府別宮」とある旧国府も榊葉集に言う古国府と同じ地即ち府中の第一期国府の地を別の言葉で言ったものと解すべきであろう。榊葉集の神領地は石清水八幡文書別宮の地で、現在の小八幡の地を指したものと思われる。沼田頼輔氏が引用の文書の別宮の地を平塚八幡宮の地に想定して、旧国府をその附近の古瓦出土地に求められたことは、今でわほとんど支持する人がないようである。「旧相模国府の別宮」はやり小田原市小八幡（古八幡）の八幡社であると私は信じている。

（つづく）

話のひろば

輪禍は江戸時代にも

江戸時代に輪禍があったといっても信じないかも知れないが、実際にあったのだから……勿論それは自動車ではない。大八車にひかれたのである。昔は大八車が幅をきかしてガラガラわがもの顔に江戸中を駈けまわったものである。そのために事故も少くなかった。

今から約二百年前の享保年間に牛込の路上で、仁兵衛・清六という二人の大八車が両方から、はさむようなかたちで、付近の十五才の少年をひき殺してしまった。

これによって幕府は、仁兵衛を死罪に、清六を遠島に流罪として処分した。

このほかにも過失で子供に大ケガをさせた車曳きが八丈島に流されている。

これによると、人命など問題にしなかったといわれる封建時代の方が、輪禍から人命を守ることに積極的であったと判断されるのである。（徳川林政史研究所編集の記録より）

赤穂義士の遺髪

大石内蔵助らおなじみの赤穂四十七士のうちの四十六人の遺髪が見つかった。所在の場所は京都市上京区の臨済宗瑞光院で、もともとの同寺は、赤穂城主浅野家とのゆかり深く、境内には四十六士の墓もあり〃西の泉岳寺〃として知られていた。昨秋寺が山科へ移転することになり、墓地の堀起し作業中、遺髪塔の下から出てきたわけである。遺髪は円筒形の土カメの中に、ひとまとめに入っており「浪士切腹後遺髪を塔に葬った」という寺の記録もこれで裏付けられたと、住職も大喜びとのことである。

鉄道記念物（二）

額田喜代春

〃一号機関車〃

明治五年五月七日（旧歴）に、新橋（今の汐留貨物駅）から品川まで一日二往復で仮りに、運輸営業が始められ、次いで桜木町（今の横浜）まで二九・一粁が出来あがったので、明治五年九月一二日（現今の一〇月一四日）午前一〇時、日比谷練兵場で東京鎮台の砲兵が撃ちだした一〇一発の祝砲と、停泊中の英国軍艦が放つ二一発の賀砲とが、いんいんと轟くなかに、運転方の英人ハートによって、鉄道誕生の汽笛を雄々しく鳴り響かせ、明治天皇に供奉する政府の役人をのせた御召列車が横浜に向って発車したのである。

当時は四輪連結タンク機関車一〇両、客車五八両、貨車七五両で、機関車は何れも二一トンないし二三トンの小さいもので、明治四年に英国から輸入されたが、当時は何れも無番号で何を基準にして番号をつけたかは一切不明であるが、ただ奇数を東部、偶数を西部に分けたらしい。

吾が国には数千数万とあった機関車のうち、本編の主人公ナンバーワン機関車は、現在東京神田万世橋の交通博物館にあるが、輸入はバルカンハウンドリイ会社製一B型で、重量二三・五トン、軸重九・一トン、動輪直径一三二一ミリで今は風雪九一年の歴史をもっているだけに、すっかりすすけていて、みるからに故物然としており、いっしょに来あがった弁慶号機関車に比較するのとあまりにも見ばえがしなく、ほんとに機関車のこっとう品としての値打であるが、明治時代の人々には、なつかしい想出のしろものである。

型は輸入されてから、たびたびの改造で、原型をそこねてしまっていて惜しいが明治四年に輸入されたころは、ピカピカ光っていて、煙突もちょっとおもしろい格構のラッパ型をしていたはじめは工事用の土運びに汗水たらして働らいていたがなにしろ気の荒い人夫や土方を使うのであり、また前回にも述べたとおり、鉄道敷設反対の勢が強かった時だったので、旧幕府の八丁堀の吟味与力。佐久間弥太吉を権大属（ごんだいさかん）に任命し、彼が両刀さして目付になり、鬼佐久間の威力をもって荒らくれ人夫を監督して、工事を進ちょくさしたのである。

そして蟻のように働らく、人夫の群のなかを走らしたもので当時は人夫までが、ちょんまげを結ってはだしで働いていた。

それからこのスター一号も新橋―横浜間鉄道建設がすんで、正式開業となると同区間の列車をひっぱって、得意になっていたが、やがて新鋭機関車が続々と出てくると、現役を退いて、新橋駅の入換用などに格下げされ、とうとう明治四四年には、お役御免となって、他の一六〇型四両と一緒に住みなれた国鉄から私鉄島原鉄道に身売りされてしまったのである。

島原鉄道でも最古の一号だというので、同鉄道の一号機関車として迎え入れ、再び花形として、相当大切にあつかってくれていたが、昭和五年七月三日国鉄で記念物として欲しいというので、当時島原鉄道の植木元太郎社長が、国鉄が、自分のところのそもそもの長男である一号機関車を欲しがる念願を理解してくれて、当時としては一〇万円相当価格のあったと思われるこの機関車を、紳士的に一台対一台で交換してくれたのである。実に人情紙より薄いといわれる現今から考えると、うそのような実話であった。そして植木社長は国鉄に割愛するにあたり、「惜別感無量」と書いて、はなむけとしたと聞くが、重親がながく手しおにかけた愛し子を生みの親に返す気持がよくわかりますね。

昭和三十四年一〇月の鉄道八八年の米寿の記念日にこの機関車を原型通りに復元し、しかも昔のように線模様をいれて、美しく塗り、東京をぐるぐる回る山手環状線や、かって走った新橋―桜木町間のなつかしい線路の上を機関士も車掌も、昔のイカメシイ制服姿で走らせてみたいと、鉄道ファンが大分希望しておったが遂に実現しなかったが、若しこれが実現されていたら世界の大ニュースとして近代化された、山手環状線並に京浜界わいは八八年昔の夢の再現にわきたったことであったろう。

当時の茶話。

一、岡蒸汽に負けてなるものかと、ある坊さんが新橋を一緒にスタートして駆けだして、横浜に到着して後を見ると、機関車が後からくるではないか、そらおれの方が速いではないかと自慢したところ「あれは汝が出てから次に出た汽車だ」といい、へたへたとしりもちついてしまった。

二、あんな黒い土を焚いて走って、さぞ熱かったろうと、手桶で水をかけてくれる婦人があって困ったという。

三、「岡蒸汽の疾きこと風の如く、火竜に似たり」、などといって、目をまわし妊婦は流産するから、乗ってはいけないとむしろ恐れを覚えたようである。

四、黒い土をもやして走るからキリシタンバテレンの法をつかって、しまいには肉を喰われてしまうから乗るな。と現今流行の若人のバーベギュウみたいに恐れていた老人もいた。

なおこの一号機関車の輸入当時の価格は一万二五二七円二八銭で、島原鉄道と交換当時の評価額は三六八三円七九銭八厘で、国鉄から島原鉄道へ代りにやった六〇〇型六五六号機関車は四百五五円だそうである。

かって新橋―横浜間一四哩を七両の客車をひいて三五分で走り、世人の目をみはらせて以来九一星霜、いまは眠る神田の鉄道交通博物館に古い夢を秘めて永遠に安らぎと栄光あれと祈ってやまない。

文苑

夏遊三題

清水専吉郎

法隆寺夏季大学

紫雲高く金色うつる五重の塔晨天ひろしいかるがの里
金色は白雲となり動きそむそら紫に法隆寺の朝
飛鳥仏白鳳奈良とならび居て平安の土塀われもしづもる

高山寺

かねて聞く鳥羽絵にしるき高山寺すぐれし眺めに悟りひらけむ
高山寺石に声あり清滝のすめるせせらぎとがの尾の奥
幻庵祭（八月二十六日）

幻庵の姿をここに藪かげの池と庭石いまきよめらる

函嶺重遊似旧盟

蓑田　天峰

回首重来五十秋。
江山無恙憶同遊。
清流一道興誰採。
滾々声喧旧酒楼。
当年意気使人驚。
酔部高吟圧水声。
今日重遊春寂寞。
一杯樽酒不堪情。

編集室より

▲われわれが新聞や雑誌に投書して、それが活字となって発表されると嬉しいが反対に没書となって紙屑籠に投入されるとよい気持ちのものでない。さりとて没書されたからとて不平や不服は云えない。編集には絶大の権利があり、取捨は自由であるからである。史談会報でもその通りで、なぜおれの投稿を出してくれない、なぜあと廻しにしたかなどと不平をならべられても、取上げるわけにはゆかない。ときあって紙面の都合上記事を短縮することも自由である。編集上についてのご不満もあろうが、僅かの紙面を工夫する編集の苦心も考えていただきたい

伊豆箱根鉄道株式会社
大雄山線
運営事務所

小田原報徳
自動車株式会社
太陽自動車
株式会社
代表者　曾我律之助

楽しい生活
明るい読書
八小堂
小田原駅前　TEL5388～9

印刷物は
弘英印刷へ
小田原市井細田八一
電話四、一〇八番

松坂屋製菓本舗
小田原市十字二
電話五二七六番

きそば
寿庵
小田原駅前
電話二八六二番

株式会社
小田原百貨店
社長　神戸英次郎

あなたの洋品店
はふや
小田原幸町
TEL2307

カメラ・写真用品
なんでも揃う
カメラの光輝堂
小田原駅前TEL 5965 4859

寝具の店
花田屋
小田原銀座2
電話3788番

甘露梅
月の衣
小田原駅前
正栄堂菓子舗
電話 5311 5312

高級陶器の店
小田原市緑1～103
小田原銀座通り
株式会社江島屋陶舗
TEL(0465)5427

畳表・日用品
問屋
茶利商店
小田原市多古25
電話2341・2374

建築金物
家庭金物
株式会社星崎仲吉商店
小田原市多古412番地
電話2718

資生堂ホールセール（特契店）
ベルマン，パピリオドール，マナー，キャロン婦人靴下代理店
有限会社山一商店
小田原市井細田428
電話3553

プラスチック
成型加工
東海化成株式会社
取締役社長　滝本友信
電話小田原五九二七番

松風
銘菓
千代菊
銘菓
甘露梅
銘菓（県指定の店）
電話2376
集栄堂本店

化粧品
おしゃれ彩華
松屋
小田原錦通り
電話三三三六

純良医薬品
株式会社オダワラ薬局
錦通り電三、〇四八

御料理
御弁当仕出し
株式会社東華軒
代表取締役　飯沼相三郎
小田原駅前
TEL(0465)5061～2

志澤
TEL3131

趣味の陶器
江島屋
小田原箱根口
電話6602

写真
イガラシ
小田原市幸3
TEL2534番

平野商会
平野久雄
小田原市十字三
電話(〇四六五)二四四九番